KOJI MATSUSHITA

やっぱり、松下。結局、松下。なんだかんだ言っても松下。今年4月に北京で開かれたアテネ五輪アジア予選会で松下が4大会連続の五輪出場を決めたとき、卓球ファンは、いつものように松下浩二の存在を噛みしめた。

アジア予選会のわずか1カ月前。世界選手権団体戦で松下は腰を痛めてリタイア。卓球台から後ろに離れ、低い姿勢で相手の強打を拾いまくるカットマンの腰にかかる負担は大きい。これまで故障がなかったのが不思議なくらいだっただけに「初めての腰痛」には嫌な説得力があり、ファンの気持ちを暗くさせた。が……。

「突然の激痛ではなく、試合で蓄積した疲れが痛みに変わったような感じでしたから、どうにかなるかな、と。予選リーグで1位になれば、その時点で五輪出場権を得られるので、腰の不安が出ないうちに決めてしまうつもりで、予選に臨みました」

予選リーグE組の松下は、1セットも落とさずに3連勝。結果的には、すんなりと五輪出場権を獲得した。

松下は偉人だ。日本人プロ卓球選手第1号、ブンデスリーガ選手第1号、フランスリーグ、中国リーグでも活躍……。偉人だけに経歴が長い。

卓球

松下浩二

4度目の集大成に挑む 孤高のカットマン

"参加することに意義がある"の名言も残るオリンピック。
だからこそ、出場する選手たちは自らのすべてをぶつける。
この大舞台に連続4回目の出場となる男子卓球界の第一人者は、
カットマンとしての原点＝守備に磨きをかけ、アテネに挑む。

さらに、01年には「チームマツシタ」の社長となり、ラケットケースと書類ケースを同時に持ち歩く日々。卓球協会ではなく民間企業が主催する国際大会を実現させるなど、松下社長だからこその業績も残している。

50～60年代の卓球界は選手の平均寿命が低くなり、攻撃型の戦術が有利になるにつれ、世界中で減少。04年6月現在で、世界ランキング47位の松下がカットマンとしては世界の最上位者であり、100位圏内には松下を含めて2～3名しかいない。

絶滅の危機に瀕する天然記念物のようでもあるカットマン。松下は誰かに保護されるわけでもなく、実力のみで、ここまで生き抜いてきた。

「プロになったときから、時限爆弾を体につけられたような気持ちで戦っています。負ければ、ボタンを押されて、おしまい。食べていけなくなるし、代表にも選ばれなくなる。だから、勝つしかない。明日死ぬくらいの覚悟で練習も試合もやっています。若い選手たちは、マジメないい子ばかり。狂ったように練習しないし、守られた環境の中から飛び出さないから、36歳の僕に勝てない」

若手の台頭はアテネまでに間に合わず、松下はアテネまで生き残った。

アテネ五輪には、ランキング1位の王励勤（ワンリーチン）（中国）を筆頭とする中国勢、サムソノフ（ベラルーシ）、ボル（ドイツ）らの欧州勢など、現状では松下よりも強いと言わざるをえない選手が多数出場する。

それでも当然、松下の目標はメダル獲得。そのために新しいサーブも練習中だ。その名は「フォアハンドサーブ」。あえてわかりやすく言えば、温泉卓球で誰もがやっているようなフォームから繰り出される普通のサーブ。しかし、松下がやるとワケが違う。これまで、松下のサーブはバックハンドのみ。フォアからサーブを繰り出すことは、急にスイッチヒッターに転身したかのような驚きを対戦相手に与える。

そして、もうひとつ、アテネへ向けての戦術を松下が明かしてくれた。

「アテネでは自分の原点に回帰します。つまり、もっと守ります。粘り強く、我慢強く、守り抜きます。五輪本番まで、守りを磨き続けます」

守備だけでは勝てない、という常識にも立ち向かい、守りに徹する松下。吟醸酒のように磨きのかかった松下の守りの味わいに酔わされ、泣かされる日が、もうすぐ来る。

Koji Matsushita
1967年8月28日、
愛知県生まれ。
1993年に日本人初の
プロ卓球選手となる。
全日本卓球選手権
シングルス優勝4回。
1992年バルセロナ以降、
4大会連続五輪出場。
172cm、62kg